

<実践事例>

地域活性化ボランティアプログラムを通じて学生は何を学ぶのか —「ふるさとワークステイ in ふくい」における学生の「学び」と成長—

山崎 智文¹・井上 泰夫¹

本稿は、京都産業大学ボランティアセンターが実施する宿泊型地域活性化ボランティアプログラム「ふるさとワークステイ in ふくい」の活動報告である。

現在、日本の農山村地域では、人口減少に伴う過疎化が進行し、農林水産業や伝統行事など、地域に根差した産業形態の持続が困難になりつつある。また、伝統行事や祭礼の担い手の減少など、地域に伝わる文化の伝承も危機に瀕している。こうした諸問題に対し、本学では毎年9月に福井県の農山村地域を訪れ、農業、林業の支援、伝統行事への参加に取り組むボランティアプログラムを実施している。

このプログラムは、正課科目ではないものの、学生の「学び」と成長を強く意識している。すなわち、「活動成果」だけでなく、参加した学生がどのような「学び」と成長を獲得したのかという「教育的効果」を評価軸としたものといえる。

本稿では、ボランティアプログラムが持つ教育的効果を最大限に発揮させるために、ボランティアセンターがどのように地域社会と協働してプログラム開発を行い、また、「学び」と成長を可視化する取り組みを行っているかを示し、本学における正課外教育活動の発展的な展開に寄与することとしたい。

キーワード：ボランティア、教育的効果、協働、地域活性化

1. はじめに

京都産業大学ボランティアセンター（以下、ボランティアセンター）は、「よりよい社会を目指すために自らが行動できる人物を育成すること」を目的とし、学生・教職員がボランティア活動に関心を持って実際に活動に取り組む後押しを行っている。2005年度にボランティアセンターの前身となるボランティア活動室が設置され、2013年度にはボランティアセンターと改称、専門職であるボランティアコーディネーターを配置し、体制の強化に努めている。

ボランティア活動は、自発的な意思に基づいて社会と関わり合っていく活動である。それゆえに、社会に貢献するだけでなく、活動者自身にとっても「学び」と成長をもたらすものである。2002年中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申）」および、2005年同答申「我が国の高等教育の将来像」において、大学生によるボランティア活動は、大きな社会的なインパクトと「学び」の可能性を有することが

述べられている。また、山田・井上（2009）は、「教室での座学ではないアウトキャンパスでのボランティア活動を大学教育の新しくて重要な機会と捉えて、社会連携と教育改善を前進させることが、学士課程教育の構築のためにも焦眉の課題となっている」と述べている。

また、佐藤（2000）は、「学生たちの直接的経験の範囲は、近年あまりに一面的で狭い分野に限られるようになり、そのために大学の授業がいかにも巧みに行われても、彼らにその狭さを乗り越えて考えるよう導くのが困難になってきている」とし、学生の直接的経験の拡充が教育的な価値を有することを指摘している。

学生たちは、さまざまな課外活動を通じて地域社会との交流や仲間との対話を重ねている。課外活動は学生の多様な社会経験を補完するものとしてその価値が認識され、その推進に向け、制度の整備が進められている。ボランティア活動もまた、学生にとって「学び」と成長をもたらす課外活動として認識されている。足立（2004）は、「ボランティアには、成長の機会を提供する『教育力』

¹ 京都産業大学 ボランティアセンター

が備わっている」「学生は、活動を通して、確かな『学びと自己成長』を得ている」とし、大学が主体的にボランティア活動を推進することの意義を述べている。大学が主催者となって課外活動プログラムをコーディネートし、学生に募集を呼びかけて実施されるボランティア活動には、学生の「学び」と成長が期待されているのである。

これらの課外活動プログラムは、「Co-curricular」と呼ばれる。Co-curricularは、正課ではないが教育的効果を期待し実施される活動である。それは、「正課外（教育活動）」といえるだろう。

今日、「社会人基礎力」に代表されるように、大学に期待される教育的効果は、専門的な知識の習得にとどまらない。コミュニケーション力や他者と協働する力など、どのようなキャリアを形成するにしても、求められてくる能力の形成をいかに大学で実践するかが問われている。これらの能力は、従来の正課科目の体系だけでは獲得することが困難である。むしろ、こうした汎用的な能力は、地域社会へのコミットメントの中でこそ、獲得されるものであろう。

ボランティアセンターが実施する宿泊型地域活性化ボランティアプログラム「ふるさとワークステイ in ふくい」は、課外活動として行われるものの、フィールドワークを伴う正課科目における教育メソッドを応用し、学生の「学び」と成長を強く意識した構造をもっている。本稿では、ボランティアプログラムがもつ教育的効果を最大限に発揮させるために、ボランティアセンターがどのように地域社会と協働してプログラム開発を行い、また「学び」と成長を可視化する取り組みを行っているかを示すこととしたい。

2. 「ふるさとワークステイ in ふくい」の概要

ボランティアセンターが本学学生を対象に実施

している「ふるさとワークステイ in ふくい」は、福井県の農山村に滞在し、地域の人たちと交流しながら、農作業や地域づくり、伝統行事への参加などに取り組む活動である。普段の生活ではなかなか出会わないさまざまな年代の方々との交流や協働を通じて、地域の文化の継承や活性化などに取り組む。福井県が実施している滞在型地域振興・交流プログラム「ふるさとワークステイ」を本学向けにアレンジしたもので、毎年学生が夏休み時期の9月中旬に、宿泊型地域活性化ボランティアプログラムとして実施している。2009年度から始まり、2017年度で9回目を迎えた。

本プログラムは、福井県の農山村等に滞在し、地域課題の発見や解決に資する活動への参加、地域住民との交流や協働等を通じて地域の活性化に貢献するとともに、非日常における活動を通じて地域社会の現状への理解を深め、参加学生の「学び」と成長に資する経験を提供することをねらいとしている。また、参加学生に対しては、下記の力を身につけることを目的として、プログラムを構成している。

- 1) 地域住民との交流および協働を通じて、地域における諸活動の存在への気づきを深める「洞察力」を身につける。
- 2) 地域における諸課題に対して地域住民やグループメンバーと協働し、その解決に取り組む「実行力」を身につける。
- 3) 普段の学生生活では得難い非日常経験や仲間との協働を通じ、一步をふみ出す「自己変革力」を身につける。

2.1. 活動スケジュール

全体のスケジュールを表1に示す。まず、福井県に向かう前に、事前のオリエンテーションを行う。そして、福井ではそれぞれの活動地に分かれて活動を行う。最終日に再度全員で集まり、全体

表1. 「ふるさとワークステイ in ふくい」全体スケジュール

	1日目	2、3、4日目	5日目
朝	集合	起床	起床
	オリエンテーション	朝食	朝食
午前	福井駅へ移動	各地域で作業	福井駅へ移動
			合流、全体ふりかえり
昼	福井駅から各地域へ移動	昼食	昼食
午後	現地オリエンテーション	各地域で作業	全体ふりかえり
	軽作業		京都駅へ移動
夜	入浴・夕食	入浴・夕食	解散
	ふりかえり	ふりかえり	

でふりかえりを実施するというのが、全体のおおまかな構成である。

2.2. 活動地域

活動地域については、これまで、福井市、勝山市、鯖江市、大野市など、3つ以上の地域に分かれて活動していたが、2015年度からは、福井市上味見地区と福井市殿下地区の2つの地域で活動している。本稿では、現在、安定的に活動が続いているこの2地域での活動を取り上げて、紹介する。

福井市上味見地区は、本プログラムが始まった当初から受け入れていただいている地域で、地域の行事である「樺八幡神社の秋祭り」のお手伝いが主な活動である。お祭り前日の準備から、当日の担い手まで、地域の方々と一緒に取り組む。それ以外にも、そのときの地域のニーズに応じて、赤かぶら畑での農作業や登山道の整備、古民家の改築作業などを行ってきた。

福井市殿下地区は、2014年度より受け入れていただいている。地域で取り組まれている東日本大震災の被災者受入活動のお手伝いとして、空き家となった古民家の改築作業を行うのが主な活動である。また、地域の方々に運営されている農家レ



図1. 上味見地区の活動の様子



図2. 殿下地区の活動の様子

ストランの活性化のためのお手伝いとして、レストランの裏庭整備や改築に向けた準備作業などを行ってきた。

3. プログラムの作り込み

3.1. プログラムづくりの視点

本プログラムを通じて、ただ「楽しかった」「よかった」という感想だけに止まらず、そこで得た気づきを学生自身の「学び」と成長へとつなげていくことが大切である。そこで、私たち運営者は、4つの「し」の視点から、プログラムを作り込んでいる。

1つめは、「しこみ」である。教育的効果を最大限に発揮させるためには、地域との協働が不可欠である。そのために、事前に地域の受入担当者との協議し、何を目的に本プログラムを実施するかというビジョンの共有を図ることが重要である。

2つめは、「しくみ」である。地域の受入担当者との事前のやりとりを踏まえて、地域の課題解決と学生の学びの両方が盛り込まれるようなプログラムづくりをすることが必要である。活動が学びへと展開していくように、事前のオリエンテーションや日々のふりかえり、事後の全体ふりかえりの場を設定する。

3つめは、「しかけ」である。学生の学びを促すために、オリエンテーションやふりかえりの場をどのようにデザインするかが重要である。学生同士のやりとりから生まれる相互作用の中で、自分は何を考えたのかを可視化できるようにし、学生の気づきを深める場をデザインする。

4つめは、「しあげ」である。ふりかえりでは、それぞれが体験したことを見つけ直し、語り合い、共有する。他者との相互作用の中で、自分が考えたことを言語化し、そこから得られた新たな発見とともに、今後の自身の生活にこの活動経験で得たことをどう活かしていくかを考えることで、「学び」と成長につなげる。

3.2. 実際のプログラム運営

第2章で述べた本プログラムを通じて学生に身につけてほしい力を見据えて、前節で述べた4つの「し」の視点から、実際にどのようにプログラムを運営しているかを紹介する。

初めて活動する地域の場合、地域が抱える課題や現状、それらに対する地域の取り組み、そして、学生に担ってほしい活動内容を伺う。そして、大学側からは、学生の学びを深めるために、地域の方々から学生にどういったことを発信してほしい

か、どのような関わり方をしてほしいかを伝え、相互の理解を図るところからプログラムを作り始めている。次年度も同じ地域で活動するときは、前年度の活動の様子を踏まえ、お互いの要望を突き合わせ、プログラムを作り込んでいく。とくに、活動中、学生が地域の方々と一緒に活動したり、直接地域の方々のお話を聞いたりする場をなるべく盛り込むようにしている。それは、学生自身が見聞きしたことから、地域の理解を深め、地域課題に対する自身の考えを巡らせるためであり、気づきを深める「洞察力」を身につけることにつながる。

オリエンテーションでは、学生たちが目的意識を持って活動に取り組むよう、地域と活動の意義について理解を深め、自分はどこに関心を寄せて活動に参加するかを考える時間を設ける。実施年度によって聞く内容を変えてきているが、「田舎のイメージ」を聞き、ふりかえりの際に、実際の活動を通じてどう変化したか、あるいはしなかったかを考える時間を持ったり、「自分ががんばろうと思っていること」を聞き、ふりかえりにて、その目標を達成できたかを考える時間を持ったりと、事前のオリエンテーションと事後のふりかえりをセットにして実施している。これにより、目的意識を持って活動に取り組む「実行力」につなげる。



図3. オリエンテーションの様子

1日の終わりに実施するふりかえりでは、その日の活動で印象に残ったこと、自分自身ががんばったこと、疑問に思ったことを個人作業で書き、全体で共有する。さらに他のメンバーから自分に対するコメントを書いてもらい、それを受けて、自分が発見したことを書くということも行う。他者へのコメントを書くには、ただ活動するだけでなく、全体を見て、他者の様子を見ることも必要になってくる。また、最終日に行う事後のふりかえりでは、活動全体を通して、自分自身が印象に残ったこと、がんばったこと、疑問に思ったこ

と、発見したことをグループで共有し、活動を通じて自分自身が得たことを、今後どう活かしていくかを考える。これらのことから、自分自身の視点をアップデートしていき、実際の活動や今後の生活に活かしていこうとする「自己変革力」を養っていく。



図4. 日々のふりかえりの様子



図5. 事後の全体ふりかえりの様子

4. 成果

次に、第3章で述べたプログラムの作り込みにより、参加学生、そして活動地域にどのような効果をもたらしているのかについて述べたい。

4.1. 参加学生の反応

まず、参加した学生のアンケートを見ると、「総合的に、この企画に参加しての感想は、いかがでしたか？」という質問に対して、2015年度、2016年度は全員が、2017年度は18人中17人が「よかった」あるいは「どちらかといえばよかった」と答えた(表2)。また、「やりがいを感じた活動はありましたか？」という質問に対しては、全員が「はい」と答えている(表3)。このことから、やりがいを感じたことで、参加の満足度が高いことが伺える。

加えて、地域課題の理解を図る質問として、「プログラムを通じて地域の課題や特性について理解を深めることはできましたか?」と聞いてみたところ、どの年も、全員が「できた」あるいは「少しはできた」と答えている(表4)。

表2. アンケート：参加しての感想(単位：人)

	2015年度 (N=21)	2016年度 (N=14)	2017年度 (N=18)
よかった	19	14	15
どちらかといえ ばよかった	1	0	2
どちらともいえ ない	0	0	1
どちらかといえ ばよくなかった	0	0	0
よくなかった	0	0	0
無回答	1	0	0

表3. アンケート：やりがいがあったか(単位：人)

	2015年度 (N=21)	2016年度 (N=14)	2017年度 (N=18)
はい	21	14	18
いいえ	0	0	0

表4. アンケート：地域課題の理解(単位：人)

	2015年度 (N=21)	2016年度 (N=14)	2017年度 (N=18)
できた	13	9	12
少しはできた	8	5	6
あまり できなかつた	0	0	0
できなかつた	0	0	0

事前のオリエンテーションの内容については、どの年度もほとんどの学生が「よかった」と答えている(表5)。事後のふりかえりについては、年度ごとに多少の差はあるものの、「よかった」と答えた学生は、2015年度は21人中13人、2016年度は14人中13人、2017年度は18人中16人と、いずれにおいても満足度は高い(表6)。

表5. アンケート：オリエンテーション(単位：人)

	2015年度 (N=21)	2016年度 (N=14)	2017年度 (N=18)
よかった	18	13	18
まあまあ	3	1	0
あまり よくなかつた	0	0	0
よくなかつた	0	0	0

表6. アンケート：全体ふりかえり(単位：人)

	2015年度 (N=21)	2016年度 (N=14)	2017年度 (N=18)
よかった	13	13	16
まあまあ	6	1	2
あまり よくなかつた	1	0	0
よくなかつた	0	0	0
無回答	1	0	0

4.2. 参加学生の反応に対する考察

これらの質問項目に対して、好評価を得られたのは、地域との協働によりプログラムを作り込んでいることが大きく影響していると考えられる。双方のニーズをすり合わせた作り込みを行うことで、参加学生の地域課題や活動意義への理解が深まり、仲間と協働して活動や生活を行うことの楽しさも相まって、本プログラムに対する満足度も高まったと考えられる。全体的な感想として、「一度も家に帰りたと思わないくらい、素晴らしい体験ができた。ずっと楽しかった。」「普段はできない体験をたくさんして、とても勉強になった。楽しかった。」「得られたもの、知ったことがたくさんあって、とてもよかった。」という声があった。さらに「地域の人々と交流して様々な知識を得ることができた。」「過疎地域の厳しい面と可能性の両面を勉強できた。」という声もあった。ただ単に楽しいという気持ちだけではなく、地域住民との交流や仲間との協働があったことで、様々な気づきが促された。

ふりかえりの感想では、「自分の考えの変化に気づけた」「総括を通して理解が深まり、今後の課題がわかった」「他のメンバーの考え、思いを知るこ

とができて自分で気づけなかったことを知ることができた」などの声があった。個人の省察に終わらせるのではなく、他者との共有により言語化が促され、学生の学びが広がっていることがわかる。

4.3. 地域の反応

受入担当者に学生に対する期待を聞いたところ、「地域の方と交流を持ち、地域のお祭りを支えてくれること、また、上味見の良いところ、また、抱えている課題を感じてもらおうこと」「地元の間人だけでは辛く苦しい作業を若さで明るく楽しい作業に変えてくれること」という回答だった。やはり、まずは地域のことについて知ってほしいという思いと、そこに若い力を注ぎ込んでほしいという期待があることが伺える。

学生の活動参加への感想としては、「しっかりとワークに取り組んでおり、大変なことも積極的に行っていた」「こちらが困っていることや問題点を理解してくれて、一所懸命に協力してくれた」と好評価をいただいた。学生が活動を通じて地域に対する理解を深め、地域の役に立ちたいと活動に取り組んだことが、地域の期待に応えることにもつながった。

また、福井市上味見地区では9年間、福井市殿下地区では4年間の活動を積み重ねていくなかで、受入担当者だけではなく、地域住民全体にも、学生の活動が受け入れられつつある。毎回、参加する学生メンバーは違って、本学の学生が毎年訪れ、それぞれの地域のために活動を行う姿を見て、学生が地域で活動することへの理解が広がっていている。上味見地区では、毎年参加している地域のお祭りにて、長年途絶えていた御神輿を復活させようという話が出ている。学生がお祭りの担い手として取り組む姿に、地域住民の思いが重なり、期待が高まっている。殿下地区では、本プログラムに関わってくださる地域の方々が年々増えていっている。学生の活動中は仕事で関われない方々でも、差し入れや交流会への参加で、学生と関わろうとしてくださり、徐々に受け入れていただいていることを実感している。いずれにおいても、地域と大学とが双方の協働によりプログラムを作り込み、学生が地域への理解を深めながら、活動に懸命に取り組んできたことが、地域の活力にもなっているといえる。

5. おわりに

このように、「ふるさとワークステイ in ふくい」では、意図的に学生の「学び」と成長に焦点を当

て、その獲得のためにさまざまな作り込みを行っている。これらの作り込みは、「サービスマーケティング」と呼ばれる教育手法を応用したものである。津止・桜井（2009）はJacobyを引用し、「サービスマーケティングは、学生達が、人々とコミュニティのニーズに対応した活動に従事する中で学ぶ、経験学習のひとつの形であり、そこには意識的に学生の学びと成長を促進するように設計された構造的な機会が含まれている」と定義し、その構成要件として「省察」と「互惠」を挙げている。これまで述べてきたように、「ふるさとワークステイ in ふくい」においては、「省察」の機会として、ふりかえりを重視している。また、地域との綿密な打ち合わせを通じて双方のニーズを共有することで、「互惠性」を持つプログラムとなっている。

ボランティアセンターでは、「ふるさとワークステイ in ふくい」をはじめ、本学構成員がボランティア活動を通じて市民社会の担い手として成熟するプロセスを重視したプログラムを実施している。いずれも、従来のボランティア観の主流であった「奉仕」、すなわち、「地域社会の課題解決のために学生が奉公する」という活動から、大学、地域それぞれのニーズを丁寧にマッチングさせ、地域社会の課題解決への参加・参画を通じて、参加学生が「学び」と成長を獲得するという「互惠性」を持った活動として位置付けている。

サービスマーケティングはほとんどの場合、単位付与を伴う正課科目において行われるものであるが、桜井・松瀬・井上（2009）は、「大学のボランティアセンターの事業は正課授業外（Co-curricular）でのサービスマーケティングといった性格を有するの当然の流れであろう」と指摘している。すなわち、大学が主体となって実施するボランティア活動においては、地域社会への貢献という「地域のために」から、地域社会との協働の中で、未来を担う世代の市民としての成熟を共に担う、という「地域とともに」へと、視点を変化させていく必要があるだろう。また、従来の「正課一課外」の二極的な分類ではなく、「正課外における教育活動」の重要性を殊に認識し、その実現に向け、制度を整えていくことも焦眉の課題となるだろう。

参考文献

- 足立陽子（2004）大学におけるボランティアセンター設置の必要性に関する一考察. 津止正敏, 足立陽子 編 大学生とボランティア-大学ボランティアセンタースタディⅡ-. 立命館大学人間科学研究所: p.123

- Jacoby, B. (1996) *Service-Learning in Higher Education: Concepts and Practices*. Jossey-Bass Publishers
- 文部科学省 (2002) 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について (答申). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1287510.htm (参照 2017.12.11)
- 文部科学省 (2005) 我が国の高等教育の将来像 (答申). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm (参照 2017.12.11)
- 桜井政成, 松瀬房子, 井上泰夫 (2009) 大学におけるボランティア活動支援の意義と機能－立命館大学ボランティアセンターを事例に－. 桜井政成, 津止正敏編 *ボランティア教育の新地平 サービスラーニングの原理と実践*. ミネルヴァ書房, 京都: p.101
- 佐藤進 (2000) 学生の「経済的経験」を考える－経済学教育を受ける主体的前提について－. 「経済論叢別冊」調査と研究 (19): p.2
- 津止正敏, 秋葉武, 足立陽子編 (2003) ボランティアケーススタディ－立命館大学におけるボランティア教育の推進と環境整備に向けて－. 立命館大学人間科学研究所, 京都
- 津止正敏, 桜井政成 (2009) 学校教育とボランティア活動を巡って－本書の論点整理－. 桜井政成, 津止正敏編 *ボランティア教育の新地平 サービスラーニングの原理と実践*. ミネルヴァ書房, 京都: p.10
- 山田一隆, 井上泰夫 (2009) ボランティア活動から学生は何を学ぶのか－2007年度立命館大学学生調査を事例として－. 桜井政成, 津止正敏編 *ボランティア教育の新地平 サービスラーニングの原理と実践*. ミネルヴァ書房, 京都: p.49

learning and growth. Because of this, it is considered a “co-curricular activity.” It provides both opportunities for student learning and growth while also making tangible contributions to the community.

In order to maximize the educational effect of the volunteer program, the volunteer center collaborates with the local community to develop programs, and to visualize the students’ learning and growth. We would like to show you the educational value of co-curricular activities and contribute to the development of the other co-curricular activities at our university.

KEYWORDS: Volunteer, Educational Effect, Collaboration, Community Activation

2018年1月12日受理

1 Center for Volunteer Programs, Kyoto Sangyo University

What do Students Learn through Community Engagement Volunteer Programs? —Student Learning and Growth during “Furusato Workstay” in Fukui—

Chifumi YAMAZAKI¹, Yasuo INOUE¹

This paper is a report on Furusato Workstay Community Engagement Volunteer Program in Fukui conducted by Kyoto Sangyo University Volunteer Center.

Furusato Workstay in Fukui is not part of the standard academic curriculum, but is structured in a way that strongly encourages student

